

主要産地における平成27年産水稻の収穫量及び作柄概況等について 第7報（1月20日現在）

作成：公益社団法人米穀安定供給確保支援機構情報部（平成28年1月21日）

全 国 道 府 県	収穫量（主食用）					作況		品質概況等		参考		
	収穫量 ①	前年産収穫量 ②	前年産収穫量 との比較 (①-②)	平成27年産 生産数量目標 との比較	平成27年産 自主的取組参 考値との比較	作況指数 (27年産)	前年産 との比較	27年産水稻 うるち玄米 1等米比率 (27年12月末)	26年産水稻 うるち玄米 1等米比率 (26年12月末)	生産数量目標		平成28年産 自主的取組 参考値
										平成28年産	平成27年産 との比較	
	t	t	t	t	t			%	%		t	t
全国	7,442,000	7,882,000	▲ 440,000	▲ 68,000	52,000	100	▲ 1	82.6	81.5	7,430,000	▲ 80,000	7,350,000
北海道	559,600	597,200	▲ 37,600	12,270	21,020	104	▲ 3	93.0	83.3	541,500	▲ 5,830	535,669
青森	229,800	257,400	▲ 27,600	▲ 12,660	▲ 8,780	105	1	93.4	87.7	239,877	▲ 2,583	237,294
岩手	269,400	287,700	▲ 18,300	▲ 1,810	2,520	105	0	95.6	92.7	268,321	▲ 2,889	265,432
宮城	348,400	379,600	▲ 31,200	▲ 220	5,350	103	▲ 2	83.0	92.5	344,906	▲ 3,714	341,193
秋田	419,400	453,000	▲ 33,600	1,860	8,540	103	▲ 1	90.9	91.1	413,092	▲ 4,448	408,644
山形	354,300	380,700	▲ 26,400	9,800	15,310	103	▲ 2	94.7	92.7	340,830	▲ 3,670	337,160
福島	342,600	350,600	▲ 8,000	3,050	8,470	101	▲ 3	90.7	92.1	335,933	▲ 3,617	332,316
茨城	345,400	396,200	▲ 50,800	8,030	13,420	96	▲ 9	84.4	92.9	333,776	▲ 3,594	330,182
栃木	287,300	313,700	▲ 26,400	▲ 11,390	▲ 6,620	98	▲ 2	90.4	96.3	295,508	▲ 3,182	292,326
埼玉	152,200	169,800	▲ 17,600	930	3,350	97	▲ 5	66.2	78.0	149,659	▲ 1,611	148,047
千葉	297,500	325,300	▲ 27,800	51,010	54,950	101	▲ 3	88.8	94.6	243,864	▲ 2,626	241,239
新潟	539,600	576,000	▲ 36,400	18,310	26,640	97	▲ 4	78.7	74.9	515,737	▲ 5,553	510,184
富山	191,200	193,100	▲ 1,900	5,550	8,520	103	2	90.8	87.1	183,672	▲ 1,978	181,695
石川	123,200	123,400	▲ 200	▲ 430	1,550	101	3	86.7	72.7	122,313	▲ 1,317	120,996
福井	123,800	126,000	▲ 2,200	▲ 1,660	340	99	1	86.7	86.0	124,124	▲ 1,336	122,787
長野	194,500	195,800	▲ 1,300	500	3,600	97	1	95.8	95.3	191,933	▲ 2,067	189,867
滋賀	158,500	157,100	1,400	▲ 1,950	620	100	3	75.1	52.9	158,741	▲ 1,709	157,032
兵庫	178,900	177,800	1,100	▲ 1,540	1,340	99	2	64.9	63.2	178,518	▲ 1,922	176,596
岡山	149,500	153,300	▲ 3,800	▲ 9,050	▲ 6,520	96	2	71.3	78.2	156,861	▲ 1,689	155,172
広島	121,700	123,300	▲ 1,600	▲ 8,270	▲ 6,190	96	1	87.9	83.5	128,585	▲ 1,385	127,201
山口	100,700	103,800	▲ 3,100	▲ 8,060	▲ 6,320	97	1	74.1	74.2	107,601	▲ 1,159	106,443
愛媛	71,200	73,000	▲ 1,800	▲ 2,720	▲ 1,540	98	0	42.0	55.7	73,133	▲ 787	72,345
高知	52,800	55,600	▲ 2,800	2,730	3,530	96	1	16.8	18.9	49,537	▲ 533	49,003
福岡	172,300	176,400	▲ 4,100	▲ 10,170	▲ 7,250	95	▲ 1	37.7	43.8	180,526	▲ 1,944	178,582
熊本	171,500	180,500	▲ 9,000	▲ 17,810	▲ 14,790	97	0	52.5	55.0	187,293	▲ 2,017	185,277
宮崎	74,700	84,600	▲ 9,900	▲ 18,900	▲ 17,400	93	▲ 5	61.2	62.4	92,603	▲ 997	91,606
鹿児島	95,700	102,300	▲ 6,600	▲ 15,370	▲ 13,590	95	0	66.6	49.5	109,887	▲ 1,183	108,704

注：更新箇所について、前回より増加した箇所は二重下線で、減少した箇所は下線で表した。

	品質概況等	備考
道府県	自治体等公表資料（公表資料の抜粋）	平成27年産米の作柄・品質等の向上に関する取組等（栽培技術指導方針） （農林水産省公表資料の抜粋）
北海道	<p>・北海道の水稻の作柄は、6月下旬から7月上旬にかけて低温で経過したことにより、1穂当たりもみ数が「やや少ない」、全もみ数が「やや少ない」となったものの、8月上旬から中旬にかけておおむね高温で経過したことにより開花・受精の状況が良好であったこと、9月中旬から下旬にかけて気温が平年よりも高く、降雨は平年よりも多く経過したことにより、粒の肥大が進んだことなどから登熟は「良」となり、10a 当たり収量は559kg（前年に比べ18kg減少）となった。 （北海道農政事務所 12月4日付）</p> <p>・青死米等の重量割合は3.5%で、対前年差は5.5%減。 （農林水産省 12月4日付）</p> <p>・なつぼしは、9月中旬からの天候不良により、刈り取りが平年よりも約1週間遅れたが、玄米の外観は地域により差はあるものの、全体的に光沢、粒ぞろい、粒形は良好である。白未熟粒及び死米の混入は全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は、地域によりバラツキがある。胴割粒、被害粒、着色粒の混入は比較的少ない。 （精米工 11月6日付）</p> <p>・ゆめぴりかは、9月中旬からの天候不良により、刈り取りが平年よりも約1週間遅れたが、玄米の外観は地域により差はあるものの、全体的に光沢、粒形は良好である。未熟粒及び死米の混入は、地域によりバラツキがある。胴割粒、被害粒、着色粒の混入は比較的少ない。 （精米工 11月6日付）</p>	<p>○収量・品質の安定に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育苗管理の徹底 ・防風対策等の栽培環境整備 ・適正施肥
青森	<p>・全もみ数は平年並みだったものの、出穂期の8月上旬から中旬の気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も天候に恵まれ登熟が「やや良」となったことから、10a 当たり収量は61kgで、前年産に比べて6kg増加した。 （東北農政局 12月4日付）</p> <p>・東北での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は0.2%減。 （農林水産省 12月4日付）</p> <p>・つがるロマン（黒石）は、玄米千粒重は平年比106%と平年より重かった。青天の霹靂（黒石）は、玄米千粒重はつがるロマンよりやや軽かった。まっしぐら（十和田）は、玄米千粒重は平年並みであった。 （青森県産業技術センター農林総合研究所 11月24日付）</p>	<p>○良食味・高品質米の安定生産（気象に左右されない米づくり）に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適地・適品種の作付誘導 ・健苗育成と適期移植 ・畦畔の整備、補強と適正な水管理 ・土作りの推進と適正な施肥
岩手	<p>・ひとめぼれは、8月中旬から9月上旬にかけての天候不良（低温・降水）による影響は少なく、形質（光沢、粒形、粒揃い）は、平年並みに良好である。全体的に白未熟粒（乳白粒、腹白粒）の混入は少ない。死米の混入は地域によりバラツキがある。胴割粒は地域によりバラツキがあるため、注意が必要である。被害粒（奇形粒や碎粒）、着色粒（カメシンの被害による）の混入は少ない。 （精米工 12月11日付）</p> <p>・全もみ数が平年並みとなり、出穂期となる8月上旬の気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も天候に恵まれ登熟が「やや良」となったことから、10a 当たり収量は560kgで、前年産に比べて2kg減少した。 （東北農政局 12月4日付）</p> <p>・東北での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は0.2%減。 （農林水産省 12月4日付）</p>	<p>○良質・良食味米の安定生産及び低温障害回避のため、適期移植の指導が行われている。</p> <p>○有機物による土作りや追肥の適正実施の指導が行われている。</p>
宮城	<p>（栗原）宮城県北部の作況指数は103であった。管内生育調査ほのひとめぼれの精玄米重(kg/10a)は、平年比で登熟105%、若細92%、一泊98%であった。ひとめぼれの玄米品質は、昨年と比較して整粒比の値はほぼ同じであった。白未熟粒比はやや低く、その他未熟粒比の値が高かった。登熟初期の高温と登熟中期の低温寒照が影響したと考えられる。（1月14日付）</p> <p>（石巻）宮城県東部の作況指数は103であった。精玄米重(kg/10a)は、ひとめぼれ（広瀬）、ササニシキ（井内）ともに平年を下回った。玄米品質調査結果では、ひとめぼれ（広瀬）は、前年より白未熟粒やその他未熟粒が多くなった。白未熟粒増加の大きな要因は、出穂後の高温であると考えられる。ササニシキ（井内）は、前年より登熟歩合が2.2ポイント高く、良好な玄米品質であった。（1月13日付）</p> <p>（大崎）精玄米重(kg/10a)は、m 当たり粒数や登熟歩合が反映され、平年を下回った。ただし、ササニシキはm 当たり粒数が多かつとも、あり平年をやや上回った。（12月28日付）</p> <p>・田植期以降8月上旬まで天候に恵まれ全もみ数がやや多かったものの、8月中旬から9月上旬の気温・日照時間が平年を下回って経過し登熟が「やや不良」となったことから、10a 当たり収量は547kgで、前年産に比べて12kg減少した。 （東北農政局 12月4日付）</p> <p>・東北での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は0.2%減。 （農林水産省 12月4日付）</p> <p>・ひとめぼれは、9月中旬から9月上旬にかけての天候不良（低温・降水）による影響は少なく、形質（光沢、粒形、粒揃い）は、平年並みに良好である。前年と同様に白未熟粒（乳白粒、腹白粒）及び白死米の混入がやや目立つ。青未熟粒の混入は少ない。胴割粒、被害粒、着色粒（カメシンの被害による）の混入は比較的少ない。地域による品質の差は比較的少ない。 （精米工 11月6日付）</p>	<p>○良質・良食味米の安定生産（気象変動に強い米づくり）に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作型の改善（出穂期を遅らせる作型） ・土づくりの推進と適正な施肥 ・適正な水管理と病害虫防除等
秋田	<p>・あきたこまちの玄米の外観（光沢、粒形、粒揃い等）は、地域により若干差はあるものの全体的に良好である。白未熟粒の混入は散見される程度で全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は平年並みだが、地域により差がある。胴割粒、被害粒、死米の混入は平年並みで少ないが、地域により差がある。着色粒は一部に散見される程度である。 （精米工 12月11日付）</p> <p>・全もみ数が平年並みとなり、出穂期となる8月上旬の気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も天候に恵まれ登熟が「やや良」となったことから、10a 当たり収量は589kgで、前年産に比べて7kg減少した。 （東北農政局 12月4日付）</p> <p>・東北での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は0.2%減。 （農林水産省 12月4日付）</p> <p>（鹿角）かづの農業協同組合によると、平成27年産あきたこまち（特別栽培、エコライス等含む）の一等米比率は11月30日現在で88.5%となっている。（12月4日付）</p>	<p>○良質・良食味米の生産に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・土づくりの推進と栽植密度の適正化 ・適正な水管理と雑草防除の徹底 ・適正な施肥管理と適期刈取り等

	品質概況等	備考
山形	<ul style="list-style-type: none"> ・田植期以降8月上旬まで天候に恵まれ全もみ数がやや多かったものの、8月中旬から9月上旬の気温・日照時間が平年を下回って経過し登熟が「平年並み」となったことから、10a当たり収量は614kgで、前年産に比べて9kg減少した。 (東北農政局 12月4日付) ・東北での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は0.2%減。 (農林水産省 12月4日付) ・はえぬきは、8月中旬から9月上旬にかけての天候不良(低温・降水)による影響は少なく、形質(光沢、粒形、粒揃い)は、平年並みに良好である。白未熟粒及び死米の混入がやや目立つものがあるものの、全体的には少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は、地域によりバラツキがある。胴割粒、被害粒(発芽粒や奇形粒)、着色粒(カメムシの被害による)の混入は少なく良好である。地域(庄内、内陸)による品質の差は少ない。 (精米工 11月13日付) 	<ul style="list-style-type: none"> ○気象変動に対応した品質向上技術(水管理、適期移植)の指導 ○土壌診断に基づくリン酸、カリ等の適量施肥等の指導が行われている。
福島	<ul style="list-style-type: none"> ・田植期以降8月上旬まで天候に恵まれ全もみ数がやや多かったものの、8月中旬から9月上旬の気温・日照時間が平年を下回って経過し登熟が「やや不良」となったことから、10a当たり収量は557kgで、前年産に比べて3kg減少した。 (東北農政局 12月4日付) ・東北での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は0.2%減。 (農林水産省 12月4日付) 	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づくカリ施用、堆肥の施用による土づくり等の指導が行われている。
茨城	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数が、田植期以降、高温・多照で推移し穂数及び1穂当たりもみ数が増加したことから「やや多い」となり、登熟が、7月上旬の低温による稔実低下や8月上旬の高温と中旬以降の日照不足や降雨により粒の充実が抑制され「やや不良」となった。なお、台風第18号の影響から、西部及び南部では冠水、浸水、倒伏等の被害がみられた。 この結果、10a当たり収量は505kgで、前年産に比べ43kgの減少となった。また、作柄表示地帯別の10a当たり収量は、北部で528kg(前年産に比べ19kg減少)、鹿行で525kg(同24kg減少)、南部で526kg(同30kg減少)、西部で451kg(同89kg減少)となった。 なお、農家等が使用しているふるい目幅(1.80mm)で選別された作況指数は96となり、作柄表示地帯別の作況指数は、北部で102、鹿行及び南部で100、西部で86となった。 (関東農政局 12月4日付) ・関東・東山での青死米等の重量割合は3.2%で、対前年差は1.0%減。 (農林水産省 12月4日付) ・龍ヶ崎市(11月20日現在) <4月27日移植> ・あきたこまちの玄米外観品質は、平年より乳白粒の発生が多く(+4.3%)、整粒歩合は平年よりやや低かった(-6.2%)。乳白粒が多くなった要因として、稔数過多、幼穂形成期の低日照、出穂期以降の高温条件が考えられる。また、出穂期頃の強風が要因と思われる茶米の発生が多かった。 ・コシヒカリの玄米外観品質は、平年より乳白粒・基白粒の発生が多く(乳白粒+3.1%、基白粒+1.9%)、整粒歩合は平年よりやや低かった(-3.6%)。乳白粒が多くなった要因として、稔数過多、幼穂形成期の低日照、出穂期以降の高温条件が考えられ、基白粒が多くなった要因としては、出穂期以降の高温条件が考えられる。 ・ふくまるの玄米外観品質は、乳白粒の発生が多く、整粒歩合はやや低かった。乳白粒が多くなった要因として、稔数過多、幼穂形成期の低日照、出穂期以降の高温条件が考えられる。また、出穂期の強風が要因と思われる茶米の発生が多かった。 <5月7日移植> ・あきたこまちの玄米外観品質は、平年より乳白粒の発生が多く(+3.2%)、整粒歩合は平年よりやや低かった(-4.7%)。乳白粒が多くなった要因として、稔数過多、幼穂形成期の低日照、出穂期以降の高温条件が考えられる。 ・コシヒカリの玄米外観品質は、概ね平年並で、整粒歩合も並であった。 (茨城県農業総合センター農業研究所水田利用研究室 11月20日付) ・コシヒカリは、8月下旬から続く日照不足・降雨・台風18号などの影響により、玄米の外観は、充実不足のため光沢は劣り、扁平なものや小粒感の強いものが多い。白未熟粒の混入は、平年よりやや多く見られ、そのほとんどは日照不足により発生したものである。日照不足や降雨などが影響し、その他未熟粒の混入も多く見られる。被害粒の混入は少ないが、茶米や発芽粒等降雨や台風の影響により発生しているものが多く、多くの地域で僅かながら見られる。また、同様の要因で刈遅れているものが多くあり、過熟の傾向が見られる。死米や着色粒は平年と同程度の混入である。 (精米工 11月6日) ・あきたこまちの玄米の外観は、光沢は平年並み程度であるが、充実度・粒ぞろいは平年よりやや劣る。白未熟粒の混入は、やや見られる。その他未熟粒の混入は収穫時期の差によりバラツキがみられる。胴割粒の混入は、全体に少ない。被害粒の混入は全体に少ないが、雨の影響で刈遅れたものには発芽粒や芽くされ粒の散見されるものもある。被害粒の混入は刈遅れているものの方がやや多い傾向がある。着色粒は全体的に平年と同じか平年よりやや多い。 (精米工 10月13日付) 	<ul style="list-style-type: none"> ○良質米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。 <ul style="list-style-type: none"> ・適期移植 ・適期・適切な中干しによる茎数管理 ・適期収穫と適正乾燥・調整
栃木	<ul style="list-style-type: none"> ・コシヒカリの玄米の外観は、地域により若干差はあるものの全般的に良好である。白未熟粒、その他未熟粒の混入はやや目立つものもあるが、青未熟粒の混入は全体的に少ない。胴割粒、被害粒、死米、着色粒の混入はやや目立つものもあり、地域による差がある。 (精米工 12月11日付) ・全もみ数が、穂数がやや多かったことから「やや多い」となり、登熟が、出穂期以降、高温・多照で推移していたものの、全もみ数がやや多いことや8月中旬以降の低温・日照不足の影響により抑制されたことから「やや不良」となった。なお、台風第18号の影響から、県内全域で冠水、浸水、倒伏等の被害がみられた。 この結果、10a当たり収量は531kgで、前年産に比べ7kgの減少となった。また、作柄表示地帯別の10a当たり収量は、北部で559kg(前年産に比べ3kg減少)、中部で526kg(同11kg減少)、南部で488kg(同10kg減少)となった。 なお、農家等が使用しているふるい目幅(1.80mm)で選別された作況指数は98となり、作柄表示地帯別の作況指数は、北部で99、中部及び南部で97となった。 (関東農政局 12月4日付) ・関東・東山での青死米等の重量割合は3.2%で、対前年差は1.0%減。 (農林水産省 12月4日付) 	<ul style="list-style-type: none"> ○品質や食味の向上に向け、以下の指導が行われている。 <ul style="list-style-type: none"> ・水管理の徹底 ・生育診断に基づく適正な肥培管理 ・適期収穫
埼玉	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数が、田植期以降、高温・多照で推移したことから穂数がやや多くなり、1穂当たりもみ数が平年並みとなったことから「やや多い」となり、登熟が、8月中旬以降の低温・日照不足の影響により粒の肥大・充実が抑制されたことから「やや不良」となった。 この結果、10a当たり収量は480kgで、前年産に比べ21kgの減少となった。また、作柄表示地帯別の10a当たり収量は、東部で491kg(前年産に比べ23kg減少)、西部で460kg(同17kg減少)となった。 なお、農家等が使用しているふるい目幅(1.80mm)で選別された作況指数は97となり、作柄表示地帯別の作況指数は、東部及び西部ともに97となった。 (関東農政局 12月4日付) ・関東・東山での青死米等の重量割合は3.2%で、対前年差は1.0%減。 (農林水産省 12月4日付) 	<ul style="list-style-type: none"> ○品質・食味向上に向け、栽培管理技術の徹底及び栽培基準や栽培指針に準じた肥培管理の指導が行われている。 ○夏場の高温対策として、水管理の徹底、栄養診断に基づいた施肥の実施及び適期収穫の指導が行われている。

	品質概況等	備考
千葉	<ul style="list-style-type: none"> 全もみ数が、5月上旬以降、高温・多照で推移し一穂当たりもみ数が増加したことから「やや多い」となり、登熟が、7月上旬の低温・日照不足に加え、出穂後の高温や8月中旬以降の低温・日照不足の影響により抑制されたことから「やや不良」となった。この結果、10a当たり収量は539kgで、前年産に比べ19kgの減少となった。また、作柄表示地帯別の10a当たり収量は、京葉で524kg（前年産に比べ18kg減少）、九十九里で554kg（同22kg減少）、南房総で520kg（同12kg減少）となった。なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された作況指数は101となり、作柄表示地帯別の作況指数は、京葉で100、九十九里及び南房総で101となった。（関東農政局 12月4日付） 関東・東山での青死米等の重量割合は3.2%で、対前年差は1.0%減。（農林水産省 12月4日付） コシヒカリの玄米の光沢は、平年よりやや劣る。白未熟粒の混入は、地域によりバラツキがある。胴割粒の混入は、比較的少ない。着色粒は、平均値で0.3%の混入で、最大値で0.8%である。着色粒の混入に注意が必要である。10月以降のサンプルは、その他未熟粒の混入率が多く見られた。（精米工 10月30日付） ふさおとめは、充実度、整粒歩合及び光沢は概ね良い。肌ずれは見られなかった。粒ぞろい及び粒形は良好である。白未熟粒の混入は全体的に少ない。活青米は適度に混入している。胴割粒、被害粒の混入は比較的少ない。着色粒は全体的に散見される。（精米工 9月3日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 〇土作りの推進と適正な施肥・水管理の徹底 〇適期収穫と適正な乾燥・調製の徹底等の指導が重点的に行われている。
新潟	<ul style="list-style-type: none"> 田植期から出穂期まではおおむね天候に恵まれたことから、全もみ数は「平年並み」となり、8月中旬から9月中旬までは、気温・日照時間も平年を下回って経過し、その後、日照は回復したものの低温傾向が続いたこと、台風第15号による強風の影響等から、登熟は「やや不良」となり、10a当たり収量は527kg（前年産に比べ20kg減少）となった。（北陸農政局 12月4日付） 北陸での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は2.6%減。（農林水産省 12月4日付） コシヒカリの玄米の外観については、肌ずれは少なく、光沢がある。白未熟粒については地域によりバラツキが見られ、心白粒、基部未熟粒、腹白粒が見られた。最大で14.9%、平均値は3.7%である。胴割粒の混入も地域によるバラツキが見られ、最大16.3%、平均で4.7%である。カメムシなどによる着色粒および砕粒は比較的少ない。（精米工 10月30日付） 魚沼コシヒカリの玄米の外観については、肌ずれは少なく、光沢があり、粒ぞろいも良い。白未熟粒は、平均2.1%であり基部未熟粒と腹白粒が比較的多く見られた。青未熟粒は、平均1.4%と少ない。着色粒、砕粒、死米の混入は少ない。胴割粒は地域によるバラツキが見られ、最大9.2%、平均3.0%であった。（精米工 10月30日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 〇良質・良食味米生産推進のため、以下の指導が行われている。 <ul style="list-style-type: none"> ・土づくりによる気象変動に強い稲づくり ・適正生育量の確保と適期生育の防止 ・適正な施肥、水管理 ・適期刈取りと適正な乾燥・調製
富山	<ul style="list-style-type: none"> 田植期から出穂期まではおおむね天候に恵まれたことから、全もみ数は「やや多い」となり、8月中旬以降は気温・日照時間も平年を下回って経過したため、登熟は「やや不良」となり、10a当たり収量は559kg（前年産に比べ18kg増加）となった。（北陸農政局 12月4日付） 北陸での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は2.6%減。（農林水産省 12月4日付） 玄米の外観については、肌ずれが少なく、光沢があるものが多い。粒張りもしっかりしており、粒ぞろいも良い。白未熟粒については、地域によるバラツキが少し見られたが、自立ほどではない。胴割粒の混入は、地域によるバラツキが見られた（最大-最小差：12.1%）が、平均は4.6%と少ない。砕粒の混入も地域によりバラツキがあるが、概ね少ない。発芽粒や芽くされ粒などの被害粒およびカメムシなどによる着色粒はほとんどない。（精米工 10月13日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 〇土壌診断に基づく土作り 〇高温登熟を回避するため、以下の指導が行われている。 <ul style="list-style-type: none"> ・「コシヒカリ」の適期移植の実施 ・適期・適切な中干しの徹底 ・肥料の適期・適量施肥
石川	<ul style="list-style-type: none"> 田植期から出穂期まではおおむね天候に恵まれたことから、全もみ数は平年並みとなり、8月中旬以降は気温・日照時間も平年を下回って経過したため、登熟は平年並みとなったことから、10a当たり収量は522kg（前年産に比べ14kg増加）となった。地帯別には、加賀が544kg（同19kg増加）、能登が493kg（同9kg増加）となった。作柄を示す農家等が使用しているふるい目幅ベースで算出した作況指数は、平年並みの101となった。地域別には、加賀が101、能登が100となり、いずれも平年並みとなった。（北陸農政局 12月4日付） 北陸での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は2.6%減。（農林水産省 12月4日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 〇良質・良食味生産に向け、以下の指導が行われている。 <ul style="list-style-type: none"> ・緩効性肥料の普及 ・過繁茂を回避するため基肥量の見直し ・適正窒素の確保
福井	<ul style="list-style-type: none"> 田植期から出穂期まではおおむね天候に恵まれたことから、全もみ数は「やや多い」となったものの、8月中旬以降は気温・日照時間も平年を下回って経過したため、登熟が「やや不良」となったことから、10a当たり収量は「平年並み」の518kg（前年産に比べ8kg増加）となった。地帯別には、嶺北が523kg（同8kg増加）、嶺南が491kg（同9kg増加）となった。作柄を示す農家等が使用しているふるい目幅ベースで算出した作況指数は、「平年並み」の99となった。地域別には、嶺北、嶺南ともに99となり、いずれも「平年並み」となった。（北陸農政局 12月4日付） 北陸での青死米等の重量割合は2.7%で、対前年差は2.6%減。（農林水産省 12月4日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 〇土づくりと適切な水管理の徹底 〇高温登熟回避による品質向上を図るため、適期移植等の指導が行われている。
長野	<ul style="list-style-type: none"> 全もみ数が、田植期以降、高温・多照で経過したことから穂数はやや多くなったものの、1穂当たりもみ数が幼穂形成期の日照不足等によりやや少なくなったことから「平年並み」となり、登熟が、8月中旬以降の低温・日照不足の影響により抑制されたことから「やや不良」となった。この結果、10a当たり収量は604kgで、前年産に比べ7kgの増加となった。また、作柄表示地帯別の10a当たり収量は、東信で623kg（前年産に比べ17kg増加）、南信で622kg（同23kg増加）、中信で610kg（同6kg増加）、北信で551kg（同24kg減少）となった。なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された作況指数は97となり、作柄表示地帯別の作況指数は、東信で97、南信で99、中信及び北信ともに96となった。（関東農政局 12月4日付） 関東・東山での青死米等の重量割合は3.2%で、対前年差は1.0%減。（農林水産省 12月4日付） コシヒカリの玄米の外観は、全体的に光沢、粒ぞろい、粒形は良好である。白未熟粒及び死米（白死米、青死米）の混入は全体的に少ない。青未熟粒の混入は地域によりバラツキがあり、特に県内でも刈取り時期が早い中信地域（松本市、安曇野市など）においてやや多い傾向である。胴割粒の混入は全体的には少ないが、地域によりバラツキがあり、青未熟粒と同様に中信地域においてやや多く混入しており、注意が必要である。被害粒及び着色粒の混入は全体的に少ない。（精米工 11月13日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 〇食味向上に向けた適量施肥 〇高温登熟障害（胴割米、白未熟米）防止のため適切な水管理 〇コスト削減のための疎植栽培等の指導が行われている。
滋賀	<ul style="list-style-type: none"> 莖数は、5月中旬から6月中旬にかけておおむね高温で経過したことから「やや多い」となった。穂数は、莖数がやや多くなったことから「やや多い」となった。1穂当たりもみ数は、幼穂形成期がおおむね天候に恵まれたことから「平年並み」となった。全もみ数は、1穂当たりもみ数が「平年並み」となったことから「平年並み」となった。登熟は、8月中旬から9月上旬にかけて気温・日照時間も平年を下回ったものの、その後はおおむね平年並みに経過したことから「平年並み」となった。刈取最盛期は、平年に比べ1日遅い9月18日となった。これらのことから、10a当たり収量は518kgで、前年産に比べて16kgの増加となった。作柄表示地帯別には、湖南は526kg（前年産に比べ16kg増加）、湖北は502kg（同17kg増加）となった。（近畿農政局 12月4日付） 近畿での青死米等の重量割合は3.7%で、対前年差は1.8%減。（農林水産省 12月4日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 〇良質米生産に向け、以下の指導が行われている。 <ul style="list-style-type: none"> ・初期の過繁茂抑制 ・もみ数過多の抑制 ・登熟期の高温回避・栄養確保

	品質概況等	備考
兵 庫	<p>・穂数は、田植え後の気象経過により東北では多く、淡路で少なくなったものの、兵庫県全体では平年並みとなった。1穂当たりもみ数は、幼穂形成期の気温・日照時間が、平年を下回って経過した県南では、やや少なく、高温・多照で経過した淡路ではやや多くなったものの、全体では平年並みとなった。全もみ数は、穂数が平年並みで、1穂当たりもみ数も平年並みとなったことから、平年並みとなった。登熟は、早生品種では出穂後の日照不足の影響で不良傾向となったが、中生・晩生品種では9月中旬以降の好天により良好となったことから、全体では平年並みとなった。</p> <p>10a当たり収量は、501kg（やや不良であった前年産に比べ14kg増加）となった。作柄表示地帯別では、県南が502kg（同17kg増加）、県北が505kg（同9kg増加）、淡路は493kg（同1kg増加）となった。</p> <p>（近畿農政局 12月4日付）</p> <p>・近畿での青死米等の重量割合は3.7%で、対前年差は1.8%減。</p> <p>（農林水産省 12月4日付）</p>	<p>○良質米生産に向け、品種別に以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適期移植 ・適期・適量施肥
岡 山	<p>・2度の低温・日照不足の影響により生育は遅れ、刈取期の最盛期は平年より6日遅れの10月11日となった。</p> <p>全もみ数は、早生品種の多い中北部では、5月の好天で分けつが良好であったことから穂数が多くなり、6月から7月中旬の低温・日照不足で1穂当たりもみ数がやや少なくなったものの、全もみ数は「平年並み」となった。一方、中生・晩生品種の多い南部では田植え後に低温・日照不足となった影響で分けつが抑制されたことから穂数がやや少なくなり、1穂当たりもみ数が平年並みとなったものの、全もみ数は「やや少ない」となった。県全体では「やや少ない」となった。登熟は、中北部では8月中旬以降の低温・日照不足の影響により「やや不良」となった。南部では気温が低めに推移した影響がみられるものの、9月中旬以降晴天が続いたことから「平年並み」となり、県全体では「やや不良」となった。</p> <p>この結果、10a当たり収量は平年を下回る505kgとなった。作柄表示地帯別にみると、南部は512kg、中北部は495kgとなった。</p> <p>作況指数（1.80mm）は「96（やや不良）」となった。作柄表示地帯別にみると、南部が「96（やや不良）」、中北部が「97（やや不良）」となった。</p> <p>（中国四国農政局 12月4日付）</p> <p>・中国での青死米等の重量割合は4.1%で、対前年差は0.7%増。</p> <p>（農林水産省 12月4日付）</p>	<p>○生育状況に応じた水管理</p> <p>○高温下での登熟回避のための適期移植</p> <p>○地域や品種に適合した肥料選定等の指導が行われている。</p>
広 島	<p>・登熟が「平年並み」となったものの、1㎡当たり全もみ数が「やや少ない」ため、10a当たり収量は507kg、作況指数は96となった。1㎡当たり全もみ数は、早生品種の幼穂形成期にあたる6月下旬から7月上旬が低温で日照時間が少なかったことから、1穂当たりもみ数が平年に比べてやや少なくなったことにより、全もみ数はやや少なくなった。登熟は、8月上旬が高温・多照となったものの、8月中旬から9月上旬は曇雨天が続き、日照時間及び最高気温が平年を下回ったため、平年並みとなった。</p> <p>地帯別にみると、南部は、1㎡当たり全もみ数が「平年並み」であったものの、南部の品種構成で割合の高い中生種の登熟期にあたる8月中旬から9月下旬の日照時間が平年の約8割にとどまったことが粒の肥大に影響し、登熟は「やや不良」となった。北部は、登熟が「平年並み」となったものの、1㎡当たり全もみ数が「やや少ない」となった。</p> <p>この結果、南部の10a当たり収量は508kg（作況指数96）、北部は507kg（作況指数97）となった。</p> <p>（中国四国農政局 12月4日付）</p> <p>・中国での青死米等の重量割合は4.1%で、対前年差は0.7%増。</p> <p>（農林水産省 12月4日付）</p>	<p>○肥培管理、水管理等基本管理技術の高位平準化により外観品質向上を目指している。</p> <p>○需要動向を踏まえた売れる米作りに対応し、実需者ニーズに対応する品種の作付けによる産地の育成を図っている。</p>
山 口	<p>・1㎡当たり穂数は、早生種では、5月の気温が平年に比べ高めで経過し、日照時間も平年を上回ったため多くなった。中生・晩生種では、6月以降7月下旬まで日照時間が平年を下回ったためやや少なくなったが、全体では「やや多い」となった。1穂当たりもみ数は、早生種では6月以降7月下旬までの日照不足の間に幼穂形成期を迎えたため、もみ数が抑制されたことにより平年に比べ少なくなった。中生・晩生種は、1㎡当たり穂数が平年に比べやや少なくなったことから、補償作用により1穂当たりもみ数はやや多くなったが、全体では「やや少ない」となった。この結果、1㎡当たり全もみ数は、「平年並み」となった。</p> <p>登熟は、「コシヒカリ」等の早生種では、8月中旬から9月上旬の低温・日照不足によりやや不良となり、9月中旬以降、日照時間が平年を上回ったことから、「きぬむすめ」等の登熟時期が遅い早生種や、中生・晩生種では平年並みとなったが、いもち病が登熟に影響し、全体では「やや不良」となった。</p> <p>この結果、10a当たり収量はやや不良の491kg（前年産に比べ8kg増加）となった。作柄表示地帯別では、東部で473kg（同21kg増加）、西部で497kg（同1kg増加）、長北で492kg（同18kg増加）となった。</p> <p>作況指数は、県全体で97、東部で98、西部で97、長北で98となった。</p> <p>（中国四国農政局 12月4日付）</p> <p>・中国での青死米等の重量割合は4.1%で、対前年差は0.7%増。</p> <p>（農林水産省 12月4日付）</p>	<p>○品種特性に応じた栽植密度の確保</p> <p>○中干し等水管理の徹底</p> <p>○気象条件にあった施肥管理等の指導が行われている</p>
愛 媛	<p>・1㎡当たり全もみ数が平年並みに確保されたものの、生育期間を通して日照不足傾向で推移した上に、10月以降の低温及びいもち病の発生により登熟が阻害されたことから、作柄はやや不良となった。これらのことから、10a当たり収量は488kg（平年に比べて10kgの減少）となった。作柄表示地帯別にみると、東予は481kg（同10kgの減少）、中予は528kg（同6kgの減少）、南予は461kg（同12kgの減少）となった。</p> <p>なお、作況指数については県全体で98のやや不良、作柄表示地帯別には東予は98のやや不良、中予は99の平年並み、南予は97のやや不良となった。</p> <p>（中国四国農政局 12月4日付）</p> <p>・四国での青死米等の重量割合は3.9%で、対前年差は1.3%減。</p> <p>（農林水産省 12月4日付）</p>	<p>○品質向上に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・疎植栽培 ・移植時期の後進化 ・適正な水管理
高 知	<p><早期栽培></p> <p>全もみ数は、穂数、1穂当たりもみ数とも平年並みであったことから、平年並みとなった。登熟は、6月上旬から7月中旬の日照不足や穂いもちの発生などによりやや不良となった。</p> <p>被害は、日照不足による登熟への影響やいもち病の発生などから、総じてやや多くなった。これらの結果、10a当たり収量は462kg、作況指数は「96」のやや不良となった。地帯別の作況指数は、中東部は「96」のやや不良であったが、西部は、全もみ数がやや少なくなったことに加え、日照不足やいもち病の被害が多くなったことなどから、「94」の不良となった。</p> <p><普通栽培></p> <p>全もみ数は、穂数がやや少なくなったものの、幼穂形成期から出穂期の天候に恵まれ1穂当たりもみ数が多くなったことから、多くなった。登熟は、全もみ数が多いことに加え、8月中旬から9月上旬の日照不足や穂いもちの発生が多かったことから、不稔もみやくず米の発生が多く不良となった。被害は、日照不足による登熟への影響やいもち病の発生などから、総じてやや多くなった。これらの結果、10a当たり収量は420kg、作況指数は「97」のやや不良となった。地帯別の作況指数は、中東部「98」、西部「97」で共にやや不良となった。</p> <p>（中国四国農政局 12月4日付）</p> <p>・四国での青死米等の重量割合は3.9%で、対前年差は1.3%減。</p> <p>（農林水産省 12月4日付）</p> <p>・「コシヒカリ」は、玄米の外観は、地域により差はあるものの、全体的に光沢は良好であるが、粒ぞろいはやや不揃い、粒形はやや細く、やや小ぶりである。白米熟粒の混入は全体的に少ない。出回り初期のものは、青未熟粒混入はやや多かったが、8月下旬のものは、青未熟粒混入は少なく、その他未熟粒の混入はやや多い。その他未熟粒の混入の程度は地域による差がある。胴割粒及び被害粒の混入は比較的少ないが地域により差がある。死米の混入はやや多く、これも地域による差がある。着色粒は全体的に散見される程度である。</p> <p>（精米工 8月31日付）</p>	<p>○品質向上に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適正な肥培管理 ・適期防除 ・収穫前の水管理の徹底（早期栽培）、移植時期の後進化（普通栽培）

	品質概況等	備考
福岡	<p>・梅雨入りから7月中旬までの日照不足により分けつが抑制され穂数が少なく、1穂当たりもみ数がやや多くなったことから、全もみ数はやや少なくなった。登熟は、9月上旬まで降水量が多く寡少であったものの9月中旬以降の気象が良好に経過したことから、平年並みとなった。</p> <p>このことから10a当たり収量は480kgで作柄の悪かった前年産に比べ2kgの増加となった。</p> <p>被害は、気象被害で田植え期から分けつ期の日照不足による分けつの抑制や登熟期の日照不足に加え8月25日に襲来した台風第15号の暴風雨によるもみずれがみられる。病害は、山間部を中心に平野部の一部でも穂いもち病の発生がみられ平年に比べ多くなっている。 (九州農政局 12月4日付)</p> <p>・九州での青死米等の重量割合は1.9%で、対前年差は0.2%増。 (農林水産省 12月4日付)</p>	<p>○品質向上に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適期移植 ・中干し・間断灌水・落水時期の適正化 ・土壌診断・施肥基準に基づく適正な施肥
熊本	<p><県北地域> 全もみ数は、穂数が「少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから「やや少ない」となった。登熟は、低温・日照不足による生育の遅れや台風第15号のもみずれ・葉ずれ等の影響があったものの、9月中旬以降天候が回復したことにより「平年並み」となった。このことから、10a当たり収量は平年を下回る519kg（作柄の悪かった前年産に比べ9kg増加）となった。</p> <p><阿蘇地域> 全もみ数は、穂数が「平年並み」となり、1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから「やや多い」となった。登熟は、5月早稲えのコンヒカリについては、8月中旬～9月上旬の日照不足による粒の肥大不足、その他の品種（あきげしき、ヒノヒカリ）については、8月中旬～9月上旬までの日照不足と合わせて、穂いもちの拡大及び台風第15号によるもみずれ等の発生により「不良」となった。このことから、10a当たり収量は平年を下回る486kg（同8kg減少）となった。</p> <p><県南地域> 全もみ数は、穂数が「少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「多い」となったことから「平年並み」となった。登熟は、台風第15号の通過に伴い、早稲えのキヌヒカリの倒伏及び普通期のヒノヒカリ等で、もみずれ等の発生により不稔粒が増加したことと合わせて、8月中旬～9月上旬の日照不足、穂いもちの拡大により「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は平年を下回る488kg（同12kg減少）となった。</p> <p><天草地域> 全もみ数は、穂数は「少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから「やや少ない」となった。登熟は、早期水稲が平年並みとなったこと、普通期は台風第15号のもみずれ・葉ずれ等の影響があったものの、9月中旬以降天候が回復したことにより全体では「平年並み」となった。このことから、10a当たり収量は平年を下回る420kg（同9kg減少）となった。 (九州農政局 12月4日付)</p> <p>・九州での青死米等の重量割合は1.9%で、対前年差は0.2%増。 (農林水産省 12月4日付)</p>	<p>○品質向上に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適期移植 ・高温時の間断灌水 ・カメムシの防除 ・土壌改良資材の投入
宮崎	<p><早期栽培> 全もみ数は、日照不足等の影響から穂数が少なく、1穂当たりもみ数もやや少なくなったことから、平年に比べて少なくなった。登熟は、6月から7月の日照不足や低温、多雨等の影響から不良となった。被害は、分けつ期から登熟期にかけての日照不足や低温などの気象被害や、いもち病等の影響から、総じて平年に比べて多くなった。この結果、10a当たり収量は411kg（前年産に比べ77kg減少）となった。</p> <p><普通栽培> 全もみ数は、穂数は少なくなったが、1穂当たりもみ数が多くなったことから、平年並みとなった。登熟は、日照時間や気温日較差など気象条件に恵まれたが、1穂当たりもみ数も多く、出穂期の多雨や日照不足等の影響から、平年に比べてやや不良となった。被害は、生育期間を通しての日照不足や、いもち病等の影響から、総じて平年に比べてやや多くなった。この結果、10a当たり収量は501kg（作柄の悪かった前年産に比べ16kg増加）となった。 (九州農政局 12月4日付)</p> <p>・九州での青死米等の重量割合は1.9%で、対前年差は0.2%増。 (農林水産省 12月4日付)</p> <p>・「コンヒカリ」は、玄米の外観は、地域により差はあるものの、光沢、粒ぞろい、粒形は平年並みである。白未熟粒の混入は全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は、地域による差があり、やや多い地域もある。胴割粒、被害粒、着色粒の混入は、全体的に散見される程度で比較的小さい。死米の混入はやや多く、これも地域による差がある。 (精米工 8月31日付)</p>	<p>○適正な栽植密度の確保</p> <p>○移植時期の後進化</p> <p>○土壌診断に基づく適正施肥等の指導が行われている。</p>
鹿児島	<p><早期栽培> 全もみ数は、日照不足と低温などにより穂数が平年に比べて少なく、1穂当たりもみ数も平年並みとなったことから少なくなった。登熟は、出穂前から刈取最盛期直前まで日照不足で経過した影響から粒の充実が悪く、不良となった。被害は、生育期が日照不足で気温も低く経過したことから気象被害の影響が大きく、病虫害の発生もやや多かったことから、全体としては平年に比べて多くなった。この結果、10a当たり収量は396kgで作柄の良かった前年産に比べて59kgの減少となり、農家等が使用しているふるい目幅ベース（1.80mm）の10a当たり収量は383kg（作況指数88）となった。</p> <p><普通栽培> 全もみ数は、1穂当たりもみ数が多くなったものの、穂数が少ないことから平年に比べてやや少なくなった。登熟は、9月中旬以降の日照時間と気温日較差が平年を上回って推移したこと等でやや良となった。被害は、田植え～分けつ期が日照不足で気温もやや低く経過したことから分けつが不足して穂数が少ない等の気象被害の影響が大きく、また、いもち病等の被害も県北部を中心に多く発生したことから、全体としては平年に比べてやや多くなった。この結果、10a当たり収量は476kgで作柄の悪かった前年産に比べて13kgの増加となり、農家等が使用しているふるい目幅ベース（1.80mm）の10a当たり収量は463kg（作況指数96）となった。 (九州農政局 12月4日付)</p> <p>・九州での青死米等の重量割合は1.9%で、対前年差は0.2%増。 (農林水産省 12月4日付)</p>	<p>○高品質米の生産に向け、以下の指導が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適正な栽植密度の確保、適期移植 ・適正な施肥、水管理

注1：自治体等公表資料については地方自治体及び出先機関等が公表している資料から抜粋、日付は公表日。

注2：（精米工）とあるものは、一般社団法人日本精米工業会が提供している「米質概況情報」から抜粋。但し「米質概況情報」は一般社団法人日本精米工業会が正会員精米工場から得たサンプル（玄米）を測定したものであり、母集団として産地の評価を決めるものではない。

注3：更新箇所については下線で表した。

参考資料

平成27年産水陸稲の収穫量(農林水産省、北海道農政事務所、東北農政局、関東農政局、北陸農政局、近畿農政局、中国四国農政局、九州農政局)、
平成26年産水陸稲の収穫量(農林水産省)、
平成27年産米の農産物検査結果(速報値/平成27年12月31日現在)(農林水産省)、
平成26年産米の農産物検査結果(速報値/平成26年12月31日現在)(農林水産省)、
平成28年産米の都道府県別の生産数量目標等(農林水産省)、
平成27年産米の都道府県別の生産数量目標等(農林水産省)、
都道府県別の平成27年産水稲の生産事情(農林水産省)、
玄米品質概況(平成27年産)(8/31、9/3、10/13、10/30、11/6、11/13、12/11)(一般社団法人日本精米工業会)

H27水稲作況(成熟期生育・収量関係調査)(青森県産業技術センター農林総合研究所 11月24日)、
平成27年産稲作技術情報(総括)(大崎農業改良普及センター 12月28日)、稲作情報(総括号)(石巻農長改良普及センター 1月13日)、
栗原の稲作通信(平成27年度総括号)(栗原農業改良普及センター 1月14日)、
生育状況の情報(秋田県ホームページ「こまちチャンネル」<http://www.e-komachi.jp/> 12月4日)、
農研速報(水稲の生育状況)(茨城県農業総合センター農業研究所作物研究室 11月20日)